無縁佛

池田みち子

告げるとき

落合恵子

講談社

女が別れを告げるとき
著者＝落合恵子
昭和五十四年三月二十八日第一刷発行

発行者＝野間省一
発行所＝株式会社講談社
東京都文京区音羽二―十二―二十一　郵便番号一一二
電話（〇三）九四五―一一一一（大代表）振替東京八―三九三〇
印刷所＝信毎書籍印刷株式会社
製本所＝大製株式会社
定価七八〇円
©落合恵子　昭和五十四年　Printed in Japan
乱丁本・落丁本はお取り替えいたします。

0093-306078-2253（0）　（文2）

女が別れを告げるとき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

目　次

捩れた関係……7
おもいでばなし……41
恋の匂い……69
惑いの午後……95
饒舌な夜明け……129
夏の科白……153
切りとられた時間……175
特別な他人……207
わたしという女……235

装釘カット　小沢良吉
口絵写真　崎原朝之

捩れた関係

女が、その男から初めて手紙を受け取ったのは、知り合ってちょうどひと月後のことだった。

消印は越後中里、女は三十、男二十七の正月の三日だった。

「……ここへ来てからもう四日になるのに、スキーをはいたのは二時間だけ。昨日は一日中吹雪いたが、それまでは滑降日和だったのに。なぜか、滑りたいという気が起きないのです。

皆が出かけて行ったあと、茶碗で冷や酒をぐいぐいやりながら、炬燵でだらだらしている。

もっと、うまい言葉で書きたいのだけど……、あなたのことばかり考えている。

少々、異常です。大いに、異常です。正月の東京で、あなたは相変らず、居ずまいの正しい女を演じていることでしょう。

演ずる……などと書いたら怒られそうだが、乱れることのないあなたを見ていると、そんなふうに坐った生活をしている女を識らないので、ひょっとすると、あなたの二十四時間は、すべて、演技ではないかと思ってしまうのです。

演技なら演技で、立派なものですよ。あなたと一緒に飲んでいながら、平気でカウンターに酔い潰れてしまう小生と、厭な顔ひとつせず隣りで静かに本を読んでいるあなたと……。

全く、おかしな取り合わせです。狂った取り合わせです。

あの店のママが、翌日、あんたは駄目な男だねえと言ったのが、小生を言い得ているわけだけれど、あの女(ひと)も妙な女だよ、と言ったのも、ある意味ではあなたを言い当てている。

酔い潰れた小生の隣りで、あなたが、ひっそりと本のページを繰ってる姿は、巫(かんなぎ)のようだと、あのママは言っていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

たしかに、あなたは巫のような女だ。
あなたは識らないだろうが、男にとって、特に小生のように縒れた男にとって、巫ほど、エロティックな存在はないのですよ。
居ずまいの正しい女を見ると、腰元と雲助なんぞの出てくるワジルシではないけれど、めちゃめちゃに弄んで、自分の前にひれ伏させてやりたいと思うのです。
あなたの好きな、そしてその影響で小生も好きになりつつある立原正秋の小説には、よく放惰な男と、居ずまいの正しい女が出てきます。
あそこに出てくる男は、しかし眼の見える男ばかりで、小生の理想とする姿が登場するのです。
そして、女はあなたのようだ。
崩れたり、縒れたりするような女は、ヒロインとして少ない。
あなたのように、眼の見える女ばかりだ。
厭味たらしいと言えば、見えすぎる女ばかりだ。
眼の見える女は、倖せにはなれないのですよ、と、ここで、またまた厭味を言っ

ておこう。
眼の見える女を前にした男は、酔って、阿呆のように眠りこけるしかないのですよ。
だから……。だから、あなたの前では、小生は酔いしれてしまうのかも。
卑怯な男にしかすぎない小生。
あなたのように歩いてみたい、なんぞと、少々、甘ったれた言い草だけれど……。
あなたは、竹なんですよ。
等間隔に、ちゃんと節のある。
とすると、小生は、さるすべりだ。
節も、とっかかりもない。のっぺらぼうときている。
とにかく、あなたと逢っていると、どんどん乱れていってしまうのです。
それも、あなたのせいだと、卑怯な男は言い訳してる。
こんな小生だけど、それだけに小生といると居心地がいいでしょう。と、駄目な男はすぐに居直るのです。

しかし……。
駄目な男の前では、繕わなくてもすむので、そういった意味では、居心地はいいはずと、少しは自惚れさせて下さい。
だけど、気をつけて下さい。
駄目な男というのは、すぐ、いい気になります。
だけど、そんな時には、ピシャリとやればいいのですよ。
駄目な男は臆病だから、駄目な男は小心だから。
あなたの目の隅に、淡い軽蔑がよぎっただけで、チンヤリとしてしまうに決まっている。

ここまで書いて、寝てしまった。

また冷や酒を飲んでいる。
とにかく、退屈することがない。

あなたのことを考えていると、退屈ということが全くないのです。
だけど、あなたを前にすると、駄目な自分のことばかり考えてしまうのです。
ここへ来て、はっきりとした嫉妬を覚えてます。
あなたは、やさしさに満ちている。
少々、依怙地なやさしさだ。
そして、あなたのまわりにも、やさしさが溢れている。
あなたという存在が、まわりをそうさせてしまうのだ。
小生は、やさしいあなたと、あなたのまわりのやさしさに嫉妬するのです。
戦後詩特集など、だらだらにまかせて炬燵で読んでいるものだから、あなたが心の奥のどこかで、ククククッと笑うのを気にしながら、鮎川信夫を真似て書いてみた。
そう、あなたは唇や喉では笑わない。
あなたは心の奥で、笑う女だ。声もださず、表情も変えずに、笑う女だ。
だけど、どうしてこうなのだろう。

なにをしていても、あなたの若さに似ぬ隙間のなさが、小生を焦らすのです。
小生を苛立たせるのです。
たまには、隙間を見せて下さい。
でないと、小生のような男は、すぐに行き暮れてしまう。
もっとも、痛んで綻れている小生には、本当のところ、あなたが見えないのかもしれないけれど。
で、すぐに、行き暮れてしまうのかもしれないのだけど。
なんとも悲しい残酷さを、視てしまいました……。
どうです、あなたも綻れてみては。
綻れなさい。
すると、疲れが少くなりますよ。
たまに綻れるのは、いいものです。
楽ですよ。うんと楽ですよ。
綻れることくらいなら、小生にも手伝えそうだ。

だけど、小生は、小生の糸の縒れを直します。
そして、痛みを和らげてやるつもりです。
そうしたら、あなたの隙間が、どこかに見つかるかもしれない。
そして、そこに、つけいるのです。

あなたから、小生は、とても退嬰的に映るでしょう。

中里の雪のなかから」

その日の夕方、越後中里の消印の男から、二通目の手紙が女のもとに届けられた。
相変らずふたりの好きな作家に似せた文面だった。
「また飲んでいます。
まだ飲んでいます。飲み続けています。
小生は、小生の縒れを戻すために飲むのです。
けれど、飲むと、もっともっと縒れてしまいます。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com